

力の限りを尽して

[聖書]列王記下 13章 14~19節

エリシャが死の病を患っていたときのことである。イスラエルの王ヨアシュが下って来て訪れ、彼の面前で、「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と泣いた。エリシャが王に、「弓と矢を取りなさい」と言うので、王は弓と矢を取った。エリシャがイスラエルの王に、「弓を手になさい」と言うので、彼が弓を手にとると、エリシャは自分の手を王の手の上にのせて、「東側の窓を開けなさい」と言った。王が開けると、エリシャは言った。「矢を射なさい。」王が矢を射ると、エリシャは言った。「主の勝利の矢。アラムに対する勝利の矢。あなたはアフエクでアラムを撃ち、滅ぼし尽くす。」またエリシャは、「矢を持って来なさい」と言った。王が持って来ると、エリシャはイスラエルの王に、「地面を射なさい」と言った。王は三度地を射てやめた。神の人は怒って王に言った。「五度、六度と射るべきであった。そうすればあなたはアラムを撃って、滅ぼし尽くしたであろう。だが今となっては、三度しかアラムを撃ち破ることができない。」

[序] 老年の役割

先日の新聞に「孫の一言にオロオロ」という69才のおじいさんの投書が載っていました。「中学生になった孫息子、成績が芳しくない。いらぬことと思いつつも『もっと頑張らなくては』と口にしてしまった。すかさず孫は言い返してきた。『じいちゃん、がんばるってどれくらい。それに、がんばれば絶対に成績が上がると思うの』——確かに『頑張り』に物差しはない。頑張れば成績があがるという保証もない。——努力することに価値があるのだと教訓めいたことを言うには、私の器量はあまりにも浅い。孫は私の人となりを見抜いている。じいちゃんの孫だからこの程度さ、と開き直られたら私はたじろぐばかりだったろう。幸いにも孫は何も言わなかった。助かったと思いつつも、ひよっとしたら私への気遣いで黙っていたのかもしれないと、じくじたる思いにかられた。——」

二週間前の私の説教は、モーセと並んで旧約聖書を代表する預言者エリヤの死に様からメッセージを汲み取りました。エリヤはただ一人で国王と対立して、不信仰に対する神の裁きの言葉を宣告し続けた預言者でした。エリヤは天から下ってきた火の戦車と共につむじ風の中を天に上っていきましました。まさに彼の生涯が嵐の中を火の戦車をもって突っ走るような激しいものだったのです。

エリシャは、この孤高の預言者エリヤの唯一の弟子でした。エリシャは、独りになって死にたいと思うエリヤに、どこまでも付き従って離れず、天に召されていく有様を見届けました。そして神の霊を注がれた預言者として、エリヤに代わって北イスラエル王国で活躍することになりました。彼は偉大なエリヤから貴重な経験や教訓を沢山学びとりましたが、預言者としての働きの面では、エリヤとは違う生涯を送っています。そしてその生涯の締めくくりが、今日の聖書の場面なのです。

[1] 三度でやめるな

エリシャ はすっかり年老いて、死の病に臥しています。そこへ北イスラエル王国のヨアシュ王が

見舞いに来ました。エリヤが対決したアハブ王から5代目の王です。「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ」と泣きました。恐らくイスラエルの東北に位置するアラム王国との間に戦争の危機が高まっていたのでしょう。預言者エリシャは若い王にとって、確かな後ろ盾である父親のような存在だったのです。ここがエリヤとは全く違います。

エリシャは王に弓と矢をとらせ、東の窓を開けさせ、自分の手を王の手の上に重ねて、アラムに向って矢を射させました。さらに複数の矢を持ってこさせて、地面を打てと命じました。ヨアシュは三度打ちましたが、そこでやめてしまいました。「五度、六度と打つべきだった。これではアラムとの戦いに三度しか勝てない」とエリシャは若い王を厳しく叱ったのでした。恐らく将来に懸念を抱き、後ろ髪をひかれる思いで死んでいったに違いありません。

ここで預言者エリシャの働きを振り返ってみます。エリシャはエリヤと違って各地に生まれた預言者集団と積極的に関わり、彼らの暮らしを援助したりしてリーダー的存在になっています。国の政治にも深く関わり、隣国アラムの王が病気にかかると、家来のハザエルに油を注いで王にさせました。また自分の国イスラエルでは、イエフに油を注いでアハブ王朝を倒し、彼を王にしてバアル信仰を一掃させています。隣国アラムが攻めて来た時には、敵の作戦を見抜いて王に助言して裏をかかせたり、敵軍の目をくらませてイスラエル軍の陣地内におびき寄せ、大軍を捕虜にしています。このように動いてくれる預言者エリシャは、若い王にとって本当に心強い後盾だったのです。

エリシャはヨアシュに「矢を持って来なさい」と命じました。弓につがえて東の空に向って射た時の矢は単数ですから、一本の矢でした。しかし地面を打つための矢は複数形です。また動詞は射るではなく、打つです。ですから幾本もの矢で地面を打てと命じたのです。「弓折れ、矢尽きる」という諺がありますが、持てる力を出し尽して戦って負けた時に使われます。でも私たちは弓折れ、矢尽きるまで全力を振り絞って戦っているのでしょうか。エリシャはヨアシュに、戦うなら力の限りを尽くして戦う気概を持つように求めたのではないのでしょうか。

ヨアシュは、自分の国イスラエル王国の力はエリシャと共に在ると思いました。だからエリシャが死んだら、イスラエルは目に見えて弱くなると怯えて、泣いたのでしょう。いざとなったら神の人の祈りで、万軍の主なる神さまの力を頂けるといふ人頼みが、人間をどこかで安易にさせて、真剣に生きようとさせなくなる危険があります。矢を与えられたら、その矢が折れるまで打ち叩いて戦う気概、人事を尽くした上で、結果を神さまに委ねる真剣さが求められているのです。

12年間も出血が止まらず、医療費に財産を使い果たした婦人が、群がる群集をかきわけ・かきわけして、必死の思いで後ろからイエスさまに近づき、その服に触りました。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」(マルコ 5:34)。イエスさまから癒しの力を頂くのに、長患いで衰弱した彼女が必死の努力をしています。イエスさまはそれをちゃんと認めて、応えてくださったのです。「信仰は人を怠け者にはしない」とある人が言っていました。

[2] 先ず自分が

「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか」という質問に、イエスさまはこうお答えになりました。「第一の掟はこれである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟はこれである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない」(マルコ 12:28)。

第一の掟は私と神さまとの縦の関係です。第二の掟は私と隣人との横の関係です。縦棒と横棒とが一つに交わる時、十字架になります。イエス・キリストは全身全霊こめて主なる神さまを愛されました。また全身全霊こめて自分のように私たち一人ひとりを愛してくださいました。全身全霊こめた神への愛と人への愛は、十字架のイエス・キリストに於いて一つにされています。

もしも私がイエス・キリストを私の救い主と信じて告白しますならば、私たちの内にイエス・キリストが救い主となって宿ってくださいます。そして私を、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、神さまを愛する者に育ててくださいます。また自分を愛するような切実さをもって隣人を愛する者に、育ててくださるのです。

イエス・キリストを救い主と信じる者は、神を愛することに於いても、人を愛することに於いても、全身全霊の力の限りを尽くして愛するのです。地面を打って戦えと言われたら、持っている矢が全部折れるまで、全身全霊こめて力の限りを尽くして悪と戦うのです。エリシャ一人に祈りを任せて、自分は適当なところで手を引くようなことはしないのです。

エリシャのように霊の力の溢れた人が居てくれたら、もっと神さまの霊の力が教会に満ち溢れるのにと、思います。もっとまじな牧師が来てくれたら、教会は大きくなるのにと、思います。もっと頼りになる役員信者が幾人もいてくれたら、献金を気前良くしてくれる裕福な会員が居てくれたら、喜んでテキパキと奉仕をしてくれる青年がいてくれたら等々と、私たちはともすると人を頼りにしがちです。人に頼らず、私の内にいますイエスさまに祈りつつ、先ず自分が力の限りを尽くして祈ろうではありませんか。

[結] 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして

「もっと頑張らなくては」とつい言ってしまい、孫から反撃されたおじいさんは、では自分はどうだったのかと我が身を顧み、たじろいでいました。正直ですね。私たちはともすると、安易に流されがちです。エリシャに泣いてすがりながら、自分は矢を3度打ったらやめてしまったヨアシュと同じではないでしょうか。

頑張ると力の限りを尽くすとは、ニュアンスが違ふと思います。頑張るには、自分の我をはる・意固地になるという意味も含まれているのです。力の限りを尽くすとは、与えられた自分の能力を使い果たすまでやめない真剣さが込められているのではないのでしょうか。頑張っただけで人を愛するのではなく、

自分の力を出し惜しみせず、全部使って愛するのです。

心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神さまに祈るのです。聖書を読んで、神さまの御心を聞き取るのです。そして示された隣人への愛の業を、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして行なっていくのです。全身全霊を込めて愛そうとしなければ、私たちは隣人を自分のように愛せません。中学生は中学生なりに、69 才は 69 才なりに力の限りを尽くして、仕え合って生きていきたいものです。

完